

# 富士に祈る

62

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その16 —

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



大日如来を中心として、阿闍梨・宝生・阿弥陀・釈迦の各如来を祀る御霊地の五智如来堂

先回は、大陸との政治的関係が急を告げるなか、聖憲が時代の流れに従って、国民精神の作興を旨として教義を整え、御霊地の整備を進めていったことを記した。今回は、日本が盧溝橋事件を契機に戦争への道を歩み始め、その時流の中で、解脫会の活動そのものにも変化を及ぼし、さらなる国民精神の作興を開いていくために、聖憲が「靈修業」の中止を会員に通告したまでを記す。

昭和十一年（一九三七）七月七日に勃発した盧溝橋事件は、北京郊外盧溝橋付近で、夜間演習中の日本軍と中国軍の間で起った衝突事件である。中国では七七事変とも呼ばれる当該の事件は、永定河にかかる盧溝橋の北約一キロの竜王廟付近で七日夜、夜間演習を実施していた日本軍が、中国軍から数発の射撃を受けたことに端を発する。外交的な事態収拾を目指し、日中双方の代表が翌早朝

宛平県城に到着して交渉に入ったが、まもなく城外の日中両軍の間で戦闘が始まった。八日、九日と断続的に戦闘が行われた後、停戦協議が成立し、十一日には調印が済まされ、一応の決着をみた。しかし、同じ日近衛内閣は五個師団の中国派兵を決定、近衛文磨首相は上奏裁可を仰ぎ、盧溝橋事件は戦況拡大への転換点となったのである。

盧溝橋事件と前後するように、聖憲が率いる解脫会にも一つの転機が訪れていた。醍醐派総務庁から登庁の連絡を受けた聖憲は、同年六月二十五日、夜行列車に乗って京都に向かった。翌朝、聖憲を迎えたのは醍醐派執行長・岡田戒玉であった。岡田執行長は、文部省から通達されている「国家のための貢献」を行う組織作りとして、醍醐派の組織整備を行う為、ついては、解脫会にも協力を要請したいとのことであった。全国に五百を越える末寺を持ち、修験道場だけでも一千を越える醍醐派としての岡田の話は、もつともなことであった。しかしそれは、解脫会がこれまで独自に歩んできた布教のスタイルを変え、大きな問題をはらむものであった。

岡田からの提案は大きく三点であった。初めに提示した案件は、月刊誌の『解脫教』という名称を変更することであった。これに対して、聖憲は「解脫」という名称を提案した。次に提示された問題は、解脫会の祭神の問題であった。岡田は解脫会が奉斎している祭神を改めて、醍醐派の本尊である大日如来に統一することを求めてきたのである。祭神の問題は明治維新の際にも大きな論争を招いたが、宗教団体のアイデンティティの問題にも関わる。解脫会では、聖憲が実際に接した神霊を宇宙の縮図として祀っているのだから、これを変更

することはこれまでの教義にも関わる大きな問題である。聖憲は、この提案に対して、「醍醐派の教会としては、北本宿に大日如来を奉斎しているのであるから、問題はな

い」と突っぱねることにした。この問題については醍醐派離脱も辞さない覚悟を聖憲が固めていることが岡田に伝わると、岡田はこれを「当局からの申し入れがあった場合」という条件付きで、聖憲の主張を容認せざるを得なかった。

そして、三点目の問題が最も大きな問題であった。それは「靈修業」中止の申し渡しである。醍醐派では、「靈法加持」は一定の修行を行い、認可を受けたものに限り許可するという制度になっている。したがって、解脫会がこれまで地方支部において修業させていたように、認可を得ていない者に靈修業を任せていくという実態は、容認できないというのが岡田の

主張であった。この点について、聖憲は即座に「靈修業」の全面的中止を申し出た。聖憲の申し出は、提案した岡田を驚愕させた。なぜならば、「靈修業」は、これを一つのやりどころとして会員を募っていた解脫会のいわば看板にも等しい宗教行為であったからだ。

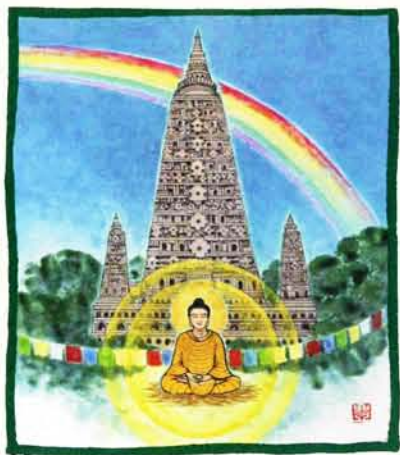
しかし、「靈修業」の中止については、聖憲には別の思惑があった。そもそも、「靈修業」は徹底した自己認識、自己反省、自我没却を行い、目に見えない霊界の存在を体験することであった。そして、その修業を通じて幽顕一致の世界の中で生かされている自分を自覚し、報恩感謝の念を持って、天の心を地に布く生き方ができるようにするための手段でもあったのである。しかし、近時の解脫会の「靈修業」は、「自己精神の浄化」ということを忘れ、その行為自体の神秘性のみを追求する行為になっていると

いう認識が聖憲にはあったのだ。聖憲は、「靈修業」中心の学びからの転換を図ろうとしていたのである。

帰京した聖憲は、岡田との話し合いを具体化するための準備に入った。折しも、七月十五日には宗教各派への文部大臣連合達示があり、聖憲はその内容を八月三日付の『解脫』臨時増刊号で伝えた。

- 一、時局ニ対スル認識ヲ徹底セシムルヲメ講演会ヲ開催スルコト
- 一、朝夕皇軍ノ武運長久ヲ祈願スルコト
- 一、出動將兵並ニ其家族ノ慰問に勉無ルコト
- 一、戦死傷者ノ弔意ヲナスコト

## お悟りを開きし所ブツダガヤ



絵・橋本豊治

お釈迦さまは、苦行によって真の悟りを開くことはできないと気づき、苦行を止める。その後、菩提樹の下で深い瞑想に入る。出家してより六年、三十五歳の時に成道、悟られた。その瞑想の為に座られた場所が金剛宝座という。金剛宝とは、悟りの智慧がダイヤモンドのように堅く、なにものにも壊されないことをあらわしている。

現在では、仏教徒が最も崇める巡礼地の一つとなっている聖地ブツダガヤは、インドのビハール州にあり、ブツダ（仏陀）のガヤ（悟りの地）という意味でボダガヤとも呼ばれている。

27 句・菅谷秀文